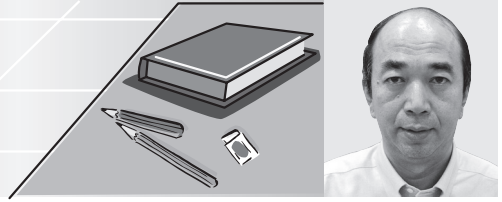


学生時代と図書館 86

—図書館とのお付き合い—

佐々木 伸一



今年の夏、中国東北部の吉林市でシャーマンの調査を行った。満州族の人たちからいろいろ聞いたが、疑問が出てきたので、その晩にホテルでネット検索をしてみた。驚いたことに満州族シャーマンに関する著書が、PDF化され丸ごと一冊あった。ありがたく拝読したが、世の中の変化を改めて強く感じた。様々なデータのデジタル化や自分の蔵書の「自炊」が話題となり、さらにクラウド化される状況においては、図書館は今後どのようになるのだろうか。

1970年代の私の学生時代は今と全く異なる。コンピュータはあったが、使うことなど夢にも思わなかった。そういった情報環境で、情報源は図書館と町の古書店だった。新刊書も買ったが、当時は新刊の専門書の出版物は数少なく、古本屋さんは図書館に次ぐ情報拠点で、地元や神田の古本屋街などへ、しょっちゅう足を運んだものである。

大学へ入って、確か2年目ごろだったと思うが、専攻を文化人類学（社会学科で実際には社会人類学であるが）とした。その時点から学科の図書室にお世話になるようになった。大学ではそれぞれの学科に図書室があり、専門書や学会誌が収蔵されていたからである。閲覧室はなかったので、本を借り出し家に持ち帰って読むスタイルが、この時から身についたようで、今もそれは続いている。

研究対象を沖縄宮古島、その祭祀とした時点で、学科の図書室は必要不可欠となる。あまりに狭い特殊な分野のため、一般の図書館では置かれているはずもない資料が、一番手じかで見られる場所だった。また卒論を書く際にはJRAI (*Journal of the Royal Anthropological Institute*) やAA (*American Anthropologist*) などの様々な学術専門誌、よその学部学科の図書室も利用させてもらったことを思い出す。持ち出しはできなかったが、幸せなことに、そのころからコ

ピーなるものが使われ始め、その時のコピーはまだ本棚においてある。

進学した大学院は新設で、入学時にはまだまだともな校舎も図書館もなく、また研究はフィールドワークで得た資料が主となってきたため、図書館は徐々に、私の行く場所から外れるようになった。

ただ図書館が情報の場だけであるかということ、私にとって必ずしもそうではない。大学2年の夏に初めて宮古島に渡った。沖縄復帰の次の年で、パスポートが不要になったこともあるが、沖縄研究で比較的空白地帯だからであった。

東京からたどり着くまでに3日間、港では馬車でも荷物を運んでいた。フィールドワーカーとしてほぼ初心者であったが、真似事的にまず基礎資料蒐集と称し、平良市役所や宮古島支庁で行政の資料をもらい、現地の図書館などを幾つか訪れた。その中に沖縄県立図書館宮古島分館があった。小さいけれど郷土史や私家本などが豊富で、宮古郷土史研究会の本拠地になっており、月例会も催され、これに参加することになった。そこから元館長の砂川さんや他の会員の方々との付き合いが始まる。宮古島へはその後、約20回位、24年間ほど通い続けたが、分館は常にフィールドワークの拠点であった。毎回行くたびに最新の資料を求めることもあったが、どちらかといえば時々、夕方、図書館の仕事が終わる時分にお邪魔し、さあ飲みに行こう、そんな感じでフィールドワークを支えてもらっていた。また、八重山にも調査に行くようになり、同じように石垣市立図書館の元館長の石垣さんとの長いお付き合いは今も続いている。

デジタル化とクラウドのこの時代、それへのヒントがこのような経験にある気がする。

ささき しんいち（教授・文化人類学）